

母子相互作用に伴う

母親の母性・女性性獲得の過程

— 出産直後の母性意識と生後13週時期の
母子行動のトポグラフについて —

利 島 保 (広島大学心理学科)
武 内 珠 美 (")
有 馬 道 久 (")

3年間にわたった本研究において、初年度の昭和55年度に「母親の乳幼児との相互作用行動が乳幼児の社会性及び知的発達に及ぼす効果についての研究」を行った。この研究では、272名の1歳半児を対象にした知的発達検査と社会性発達のチェックリストを実施し、さらに彼等の母親のパーソナリティと子供との相互作用のあり方について質問紙による面接調査を行った。この研究では、(1)内向的で、受容的な母親は、子供に動作的働きかけを多くし、子供と一緒に時に気分的落ち着きが得られると感じている。(2)母親の子供への働きかけが、言葉よりも行動的に行われるほど、社会性の発達を促進する。(3)子供の知的発達には、母親が子供とともにいる時の気分の安定が、重大な影響をもたらす。以上3点が主な結果であった。これらの母親の子供への働きかけは、母親の行動様式と単純に結び付いたものというより、母親が妊娠後徐々に形成してきたであろう母性意識を介した力動的なものであることを予見した。そこで、昭和56年度には「妊婦の母性意識の変容過程に関する研究」として、妊娠から出産に至る女性の心理的变化過程が、彼女の母性意識形成及びその後の母子相互作用のあり方に影響することを仮定し、初産婦群と経産婦群に対して、彼女達が体験する種々の環境事象との相互作用の心理的過程の時間的变化について、質問紙調査を妊娠初期、中期、後期、出産直後の4期に縦断的に実施した。この研究結果の一部(妊娠3期の結果)については、昨年の班会議及び報告書において述べたが、今年度で出産直後期までの資料が得られたので、その分析結果及び考察を報告し、続いて、本年度の研究課題である「母子相互作用の行動的構造に関する研究」について報告する。

研究1：妊婦の母性意識の変容過程に関する研究

目的：第1の目的は、女性が妊娠期から出産直後に至る時間的経過において、母親となる意識の過程を彼女たちは、どのようにたどるかについて、自己と環境の相互交流に伴う心理的プロセスとしてとらえ、その過程での心理的危機の段階モデルを考察する。第2の目的は、出産後の、子供及び自己の心理状態の認知と妊娠中の自己形成の中核的指標であった「胎動」、「体型の変化」への評価の関係から、妊娠期の心理的プロセスが、出産後の母親としてのあり方に及ぼす影響を検討する。

方法：妊娠期の女性を取り巻く物理的、对人的、社会・文化的次元の環境事象について、5つの心理的尺度に対して反応を求める「妊婦の環境移行調査」を、初産婦、経産婦群に対し、初期、中期、後期並びに出産直後の4期にわたって縦断的に実施した(詳細は、55、56年度報告書参照)。又、出産後の調査には、次の12項目についての7ポイント評定尺度を加え、出産後の母親の心理的状态を測定した。

「付加した項目」：子供の生下時体重(F1)、分娩の困難度(F2)、赤ちゃんを初めて見たときの快-不快(F3)、母親としての適応感(F4)、不安感(F5)、イライラ感(F6)、子供への愛情(F7)、子供から母親として認知されているという感じ(F8)、子供喪失への不安(F9)、母親としての自信(F10)、育児への楽しみ(F11)、母親としての自覚(F12)。

結果と考察：(1)環境移行調査：昭和56年度研究報告書で妊娠3期の結果は既に報告済みである。従って、今回は出産後の心理的反応について、20の環境事象に関する因子分析の結果のみをTable 1にあげた。この結果において、第1因子

は過去事象の因子（出産以前の物理的，社会・文化的環境事象），第2因子は現在の育児にかかわる事象の因子，第3因子は対人的因子，第4因子は子供への関心にかかわる因子と解釈できる。この結果と妊娠期の結果から，母性意識の変化過程の一般傾向は次のようにまとめられる。ア）母親として生まれる子を意識する契機過程は，対人的事象から社会・文化的慣習事象を経て，妊娠後期には生まれる子供にかかわる事象にそれぞれ関心を示し，そして出産後は妊娠期の諸事象を回顧するという心理的变化をたどる。イ）妊娠初期には，環境事象の3次元は独立的な因子として意識されるが，それ以後では，種々の環境事象が時間とともに再体制化され，各時期の心理的特徴を示すようになる。(2)環境移行に伴う認知的，情緒的变化について：4期全体を通しての因子分析の結果に基づき，慣習因子（So），対人因子（Pe），身体因子（Ph），子供因子（B）の4側面それぞれについて，認知及び情緒の各心理的尺度の平均値を求め，2（妊娠経験の有無）×4（時期）×4（環境事象）の分散分析を行い，母性意識の量的変化について検討した。その結果はTable 2に示すとおり，認知及び情緒の両尺度とも，すべての要因とそれらの間の交互作用が有意であった。即ち，初産婦群は，経産婦群より認知的にも情動的にも敏感である。また，両群とも出産期に至るまでに，漸次各環境事象への感受性は高まっていく，特にこの傾向は初産婦で著しい。認知的尺度では，初産婦は経産婦より自己の身体的事象に関心を持つ傾向が出産以前まで高く，出産後は育児にかかわる子供因子に対して関心が高い。情緒尺度についても同様の傾向が認められた。(3)出産後の母親の心理的状態と妊娠後期における自己の身体事象に対する情緒的状態の関係：Table 3に出産後の母親の心理状態に関する各項目得点と，妊娠後期での「体型の変化」と「胎動」への情緒的反応値との積率相関値及びそれらの有意性の検定結果を示した。この結果から，初産婦では，妊娠後期の胎動に否定的情緒反応を示すほど，我子を初めて見たとき不快感をもち，子供喪失への不安が低く，育児を楽しみと感じない傾向がある。経産婦では胎動に否定的であるほど，分娩を困難と感じ，子供を見たとき不快で，母親役割への不適応感，不

安，イライラが強い。又，体型の変化に否定的であるほど，分娩を困難と感じ，不適応感，不安感が高い傾向がある。(4)妊婦が母親になるまでの心理的プロセスのエピジェネシス：Table 4は，母親としての自我同一性のプロセスを妊娠3期について示したものである。この表から，妊娠期は約10ヶ月足らずの間に，種々の発達の危機がおとずれ，しかも，その期間内にTable 4に示すプロセスを達成せねばならない。従って，このようなプロセスの達成がなされない場合には，見切り発車の母子関係が生じ，早期の母子関係の質や子供の成長に否定的結果をもたらすと予想される。

研究2 母子相互作用の行動的パターンの検討

目的：過去2年間の研究は，母子相互作用を母親から子供への影響，母子相互作用が現実化する直前の母親自身の心理的成長について，調査法により生態学的に検討してきた。しかし，母子相互作用については，母親自身の内部に生起している事象として間接的にとらえてきたという反省があった。そこで，本年度は，母子相互作用の直接的把握という観点から，(1)生後4カ月の乳児とその母親のコミュニケーションのパターンを，行動的次元からとらえることが可能か否か，(2)可能であれば，それはどのような行動次元に見られるか，(3)さらに，相互作用のパターンはどのような構造であるか，以上3点について検討した。

母子相互作用の行動的測定及び相互作用パターンの判定は，従来から困難な問題とされていた。その第1の理由は，行動観察法を用いて，研究者独自の行動カテゴリーによる分析を行っているので，母子相互作用の行動的定義が明確でない。第2に，限られたカテゴリーによって母子行動の全体像を把握する事が困難である。第3は，相互作用を明確な形でパターン化することの理論的，方法的根拠が希薄であった。そこで，本研究では，Table 5に示した母親33，乳児25，計55の母子相互作用にかかわる行動項目を，過去の研究（Brazelton, et al., 1974；Key, et al. 1980；古沢ら，1976～81；大浜ら，1978；斉藤ら，1981；その他）から抽出し，これらの項目の生起を記録することを最初の作業とした。次に，どのようなカテゴリーが母子相互作用の指

標として適切かを検討するため、すべてのカテゴリーを時系列に沿って、そのカテゴリーの生起・非生起をON-OFF法(Kay & Fogel, 1980)に従って区切った。この詳細は方法の処で述べる。相互作用パターンの決定に関する理論的根拠は、母子それぞれの特定の行動が、一定のリズムで相互に共起する点に注目して母子のきずな理論を立てたKlaus & Kennell(1976), Brazeltonら(1974)らの母子相互作用モデルにその根拠を置いた。また、方法論的には石井(1980,1982)による、コンピュータ画像解析で採られた、母子それぞれの行動量に基づく相互相関係数の時系列的分析にヒントを得て、母子の行動カテゴリー共起の程度を、 ϕ 係数値の時系列的変化としてとらえる方法を考案し、行動観察から行動分析に至る一連の手続きをマイクロコンピュータによって行った。

方法：1) 母子行動の観察—(対象)1982年6、7月の4カ月検診で広島市西保健所に来所した母子15組。(観察場面)午後1時~3時の間に、同保健所の待合い室において、母親が自然な状態で子供を抱いて対面している場面。(観察手続き)ビデオ・レコーダーにより、モニター画面内に、母親の上半身と乳児の全身が入り、両者の顔の表情が読み取れる角度にカメラショットが行くようにし、1台のカメラで母子行動を約10分録画した。

2) 行動分析—(分析対象)収録した15組のうちから、画面状況がカテゴリー・コーディングに適切と判断された5組の母子(全員男児)について、1組300秒間のイベントを再生観察の対象とした。(行動コーディング)Table 5の55の行動カテゴリーに基づき、300秒間の再生観察イベントについて、ビデオ・レコーダーをコンピュータコントロールにより、0.5秒間隔のストップ・モーション操作を自動的に逐次行い、テレビモニタに現われた1ショットごとの母子行動について、1ショットごとにマイクロ・コンピュータのCRTに表示してくるカテゴリー表にライト・ペンで各々の生起・非生起を入力した。マイクロ・コンピュータはシャープ・MZ 80を使用し、1回ごとの入力データは、256KBの増設メモリーRAMから全データ記録と同時にフロッピーに書き込ん

だ。従って、各カテゴリーは、0.5秒を1ユニットとした600ユニットの時系列に沿って、それぞれのユニットに生起(ON)、非生起(OFF)が記録された(以後、この資料をON-OFF系列と呼ぶ)。3名の観察者がコーディングに参加したが、1組の母子行動再生について1名の観察者がコーディングにあたった。なお、観察者3名が、予め同一場面のコーディングを個別に行い、その一致率を求めた結果は、57.6%であった。

結果及び考察：(分析-I・母子行動の観察カテゴリーの内容の検討)5組の母子行動の観察において、生起を記録したカテゴリーの種類は平均21項目であり、3組以上に共通していたカテゴリーは、19項目であった。さらにコーディングしたカテゴリーのなかで60ユニット(30秒)以上連続して生起した行動は、「生起行動事象(Event)」とし、前者は後者とは性質が異なるものと解釈して、以後の分析から除外した。また、コーディングした総event数に対し生起率が3%以下のカテゴリーについても分析から除外した。

Table 6は、対象組Aについて各カテゴリー項目の生起持続時間の平均、生起率、生起の個数を一例として示した。さらに、総てのカテゴリーを組み合わせ、各カテゴリーのON・OFFに関する2×2の頻数分布に基づく ϕ 係数を求め、カテゴリー間の関数度から母子相互作用に伴って生起する母親、乳児及び両者の行動カテゴリーについて検討した。Table 7は各カテゴリーの組み合わせにおいて、統計的に有意な ϕ 係数($P < .01$ 以上)を示した対象数を、各セル内に正負記号の数により示した。尚、正負記号は、 ϕ 係数の値に付く記号で、正記号は2つのカテゴリーが共起したことを、負記号は非生起を示している。

Table 7を共起・非共起傾向にあるカテゴリー項目対として整理したものが、Table 8に示してある。ここで、Mは母親、Iは乳児を示している。以上の結果、生後13週時期における、母子行動場面で共起傾向にある行動項目の特徴は、視覚系コミュニケーションを主要な主段としていることである。

(分析-II・共起行動カテゴリーの時系列的サイクルの検討)分析-Iが同時的母子行動についての検討であったのに対して、Brazelton, et

al. (1974)や石井ら(1981, 1982)の研究において検討された、母子行動のサイクル性からの相互作用について、同様の検討を行動カテゴリー間の連関係数として分析Ⅰで用いた ϕ 係数の時系列的変遷という観点から検討した。即ち、分析Ⅰでの ϕ 係数が有意であったカテゴリーの組み合わせについて、一対のカテゴリーの一方を固定し、他方を1ユニット(0.5秒)ずつ0~15秒(30ユニット)前後にずらした時(以後、ラグと呼ぶ)の、1ラグの ϕ 係数値をマイクロ・コンピュータで計算させ、Fig. 1~4に示すような母子相互作用トポグラフとしてアウトプットした。この結果のうち、特に、「母親が乳児を見る(カテゴリー22)」を固定し、「乳児が母親の顔を見る(カテゴリー47)」を1ラグずつ移動した時の ϕ 係数値の時系列推移をFig. 1, Fig. 2に示した。この結果から、母親が乳児を見ているある時点から約2.5秒後に、乳児が母親の顔を見るというサイクルがみとめられた。その傍証はFig. 3, Fig. 4に認められる。即ち、「母親が他を見る(24)」と「乳児が母親の顔を見る(47)」の関係では、 ϕ が負の値を示している。即ち、これらの行動は非共起傾向があることを物語っている。又、Fig. 1とFig. 3は対象組Kの結果である。これによれば、乳児は母親の行動との相互性のサイクルが、母親の行動の先行後約2.5秒に乳児が母親の顔を見るという形で形成されていることが予想される。

(分析Ⅲ・母子相互作用パターンの構造に関する検討)以上の分析から、Table 1のカテゴリーを再構成して母子それぞれについて6つのカテゴリーに分類したのがTable 9である。このカテゴリー表に基づいてON-OFF系列を再整理して、母親(6)と乳児(6)の可能な36の組み合わせから、母子相互作用をTable 10にしめした3つのモデルパターンにまとめた。

1型は、母子双方の「視覚カテゴリー」間で顕著であった。即ち、乳児が母親を見たり、それを止めるのは、母親が乳児を見ている時で、逆に母親がそういう行動を示すのは、乳児が母親を見ない時である確率が高い。2型は、母親の「視覚」と乳児の「動き」のカテゴリー間で顕著であった。即ち、乳児が動いたり、静止したりするの

は、母親が見ているか否かにかかわらず、ランダムに起こるが、母親の乳児を見たり、見なかったりは、乳児が動いていない時に左右される確率が高かった。3型については、母親の「乳児をうごかす」と乳児の「動き」、母親の「乳児を動かす」と乳児の「視覚」、母親の「動き」と乳児の「接触」、母親の「接触」と乳児の「動き」のそれぞれのカテゴリー間に見られた。特に、この型は一方の行動と他方のそれが、一定の時間的ラグをもって交互に現われる特徴を持っている。このことは、分析Ⅱの結果との一致を示唆している。従って、生後13週くらいの母子行動の相互性を明らかにするには、このような種類の行動間の関係が、母子間にうまく形成されているか否かを検討することが必要である。さらに、母子相互作用は3型のみならず、1, 2型のものも重要である。たとえば、乳児の「視覚的行動」は母親のそれによって「梓づけ(フレイミング)」される。その意味からすると、この時期の母子相互作用は母親の視覚的行動が乳児の行動全体の「梓づけ」をしており、この「梓組み」の中で3型のようなサイクル性の共起行動も生じているといえる。

以上3つの分析によって、生後14週くらいの母子相互作用の構造について検討してきたが、過去3年間の研究を総括すると、次の5点にまとめられる。(1)母子相互作用は、妊娠期から始まっており、それは胎児との直接的関係のみならず、妊婦を取り巻く物理的、对人的、社会・文化的環境事象との相互作用という、全体的な心理的場の中の事象といえる。(2)妊娠期の婦人、特に初産婦は時期を追って生起する環境事象との相互作用を通して心理的危機の時期を迎え、母親としての意識を成長させる。また、その過程にあって、体験した心理的危機の解決の程度が、その後の子供の受け入れ態度に影響する。(3)出産後しばらくの期間の母子相互作用は、母親の視覚的注意を主要な契機事象とし、母子相互の視覚的コミュニケーションを中心に発展してくる。(4)特に、この時期の母子関係の内容を知るには、乳児と母親の行動に一定の周期をもつサイクル性の相互作用があるか否かを検討するとよい。(5)1歳半児においても、母親の行動的接触が、言語的接触以上に子供の社会的、知的発達に影響をもたらしている。

References

- Brazelton, T. B., Kaslowski, B., & Main, M. 1974 The origins of reciprocity; The early mother-infant interaction. In M. Levi, & L. A. Rosenblum (Eds.) The effect of the infant on its care-giver. New York: Wiley. 49-76.
- 石井威望 1981 コンピュータ画像処理による母子相互作用の研究。「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究・昭和55年度研究報告書, 11-19.
- 石井威望 1982 コンピュータ画像処理による母子相互作用の研究. 同上昭和56年度研究報告書, 21-30.
- Kaye, K. & Fogel, A. 1980 The temporal structure of face-to-face communication between mothers and infants. *Developmental Psychology*, 16, 454-469.
- Klaus, M. H., & Kennell, J. H. 1976 *Maternal infant bonding: The impact of early separation or loss on family development*. Los Angeles: The C. V. Mosby Co.
- 古沢頼雄, 福田陽子, 高橋道子, 石井富美子, 小林香誉 1976-1981 発達初期における母子相互性に関する研究(1-20) 日本心理学会発表論文集及び日本教育心理学会発表論文集.
- 大浜幾久子, 萩野美佐子, 斉藤こずゑ, 武井澄江, 辰野俊子 1978 言語行動の発達(1), 東京大学教育学部紀要, 18, 179-199.
- 斉藤こずゑ, 武井澄江, 萩野美佐子, 大浜幾久子, 辰野俊子 1981 生後2年間の伝達行動の発達-母子相互作用における発声行動分析, 教育心理学研究, 29, 20-29.

Table 1. 出産後の環境事象に関する因子分析
(バリマックス回転後の因子負荷行列)

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
1 つわり	.509	.049	.018	-.005
2他の入の子供	-.009	.543	.083	.547
3体型の変化	-.476	.140	-.031	-.078
4ほ乳びん	-.055	.639	-.062	.113
5ベビー服	.007	.703	.207	.007
6胎動	.706	.016	.087	.120
7岩田帯	.795	.137	.315	.086
8宮まいり	.552	.303	.287	-.204
9里がえり	.622	.300	.357	.055
10お喰いぞめ	.403	.699	.139	-.050
11初節句	.272	.751	.257	-.090
12安産の御守り	.698	.381	.273	.030
13母子手帳	.149	.479	.379	.226
14夫	.069	.063	.638	-.027
15実家の母	.299	.059	.499	.048
16生まれた子	-.076	.256	.403	.003
17友人	.312	.010	.536	.570
18近所の人	.266	-.046	.641	.358
19医師	.301	.259	.638	-.132
20夫の母	.140	.151	.582	.228

Table 2. 初産、経産婦の妊娠期から出産に至る期間における環境移行に伴う認知、情緒的变化についての分散分析結果

変動因	認 知	情 緒
A(初産・経産)	17.21 **	15.77 **
B(時 期)	9.53 **	3.26 **
C(環境事象)	88.33 **	32.54 **
A×B	.62	1.38
A×C	5.51 **	2.91 *
B×C	13.93 **	5.04 **
A×B×C	.99	.99

** : $p < .01$, * : $p < .05$

Table 3. 妊娠後期の自己身体事象への情緒的反応と
出産後の母親の心理的状態に関する
項目との相関

		F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	F 8	F 9	F 10	F 11	F 12
初妊婦 (n=11)	体型の変化への情緒	.480 ⁺	-.233	-.258	-.102	-.097	.015	.432 ⁺	-.274	.056	.036	-.048	-.168
	胎動への情緒	.039	.212	.677 [*]	.134	.056	-.106	-.249	-.401	-.506 ⁺	.549 [*]	-.467 ⁺	-.365
経産婦 (n=15)	体型の変化への情緒	.293	-.402 ⁺	.245	.354 ⁺	.414 ⁺	.168	-.071	-.261	-.015	-.059	-.348	-.050
	胎動への情緒	-.190	-.481 [*]	.626 ^{**}	.627 ^{**}	.467 [*]	.520 [*]	.218	-.006	.146	-.175	-.181	.226

+ : p < .1, * : p < .05, ** : p < .01

Table 4. 妊娠期における母親へ向かう
心理的プロセス

時期	内的環境	自己	外的環境			妊娠という発達の危機のプロセス
	胎児		IP	PH	SC	
初期	身体的変化の認識 母の身体になりつつあること	理想的母親像のイメージアップ	母親との関係の再評価	新しい対象の認知	身体的変化の認識	
中期	実感を伴った内的イメージの形成	母親役割への試み 位置づけと展望	.	関心の増大	期限つきモラトリアム	
後期	現実的イメージの獲得と外的環境への移行	母親役割のメンタルリハーサル	安定したIPの獲得	認知的再構造化	対象との関係の変化、再構造化	
テーマ	胎児の現実性の獲得	母親としての自己像の確立とうけいれ	出産・育児に必要な対象関係の獲得		母親役割を含んだ自我同一性の再確立	

Table 5. 母子行動の観察カテゴリー・コード

母	乳
1 乳児の位置をかえる	34 乳房をつかひ、さわる
2 大きく傾ける	35 乳房の力へ手をのぼす
3 手 (足) 全体をゆする	36 胸を動かす
4 手 (足) の部分をゆする	37 手 (部分、手、指) を動かす
5 水平方向へゆする (小)	38 (胸が見えない)
6 水平方向へゆする (大)	39 お乳を飲んでいる
7 乳房方向へゆする (小)	40 指を吸っている
8 乳房方向へゆする (大)	41 胸を押しつける
9 胸に近く	42 体を動かす (身をねじる、つっぱる)
10 ひざに近づける	43 足を動かす
11 乳の上に近づける	44 足 (部分) を動かす
12 乳の上に寝せる	45 (足が見えない)
13 キス、ほおずりをする	46 胸を動かす
14 軽くたたく	47 乳房の胸を見る
15 そっと手を置く	48 乳房の目を見る
16 胸をよく、さわる	49 顔を向く
17 体をさわる、くすぐる	50 笑い
18 顔を動かす	51 不快
19 顔を前に傾ける	52 顔回
20 顔を後ろに傾ける	53 口を動かす
21 顔を向く	54 (涙がわからず)
22 乳房を見る	55 快い声
23 乳房の目を見る	56 ひずかり
24 胸を見る	57 泣き
25 (目が見えない)	58 声を出す
26 笑い	
27 楽しい顔	
28 嬉し (表情がみられる)	
29 (目が見えない)	
30 ハミング、歌	
31 乳房に話しかける	
32 他人と話す	
33 楽しい様子	

Table 6. 対象組Aのカテゴリー・コーディング結果

	平均の長さ	生起率	個数		平均の長さ	生起率	個数
1	2.40	5.08	5	34			
2	0.50	0.25	1	35	2.00	2.03	2
3	1.17	3.54	6	36	1.41	16.46	23
4	1.25	1.27	2	37	0.81	3.29	8
5	0.69	2.78	8	38			
6	0.75	1.52	4	39	29.50	14.94	1
7	0.64	3.54	11	40			
8	1.25	5.06	8	41			
9	27.50	13.92	1	42	1.57	5.57	7
10	15.70	79.49	0	43			
11				44			
12				45			
13				46	0.83	3.80	9
14				47	3.77	24.81	13
15				48	3.61	16.46	9
16				49	10.36	57.72	11
17				50	1.96	12.91	13
18	0.96	6.33	13	51			
19	2.50	5.06	4	52			
20				53	1.11	10.63	19
21	2.27	17.22	15	54			
22	15.11	58.86	9	55			
23	8.45	42.78	10	56			
24	2.28	10.39	9	57			
25				58	1.56	1.52	2
26	5.83	35.44	12				
27							
28	1.89	8.61	9				
29							
30							
31	1.05	21.77	41				
32	2.50	1.27	1				
33							

Table 7. 有意な遊関性を示したカテゴリー
の組み合わせの生起頻数

	1	7	11	14	18	21	22	23	24	26	34	36	37	42	43	46	47	49	53
1						+	++	-	+	-								+	
7		-	-			-	-	+	-		+				+		+		+
11						--	+	++	-	+	--	+		+			+	-	
14						++	--	+		+		+							
18							+	+			-			+			++	-	
21						==	+	++		+-				+			++	++	--
22							+	--	+	-					+	-	++	++	+
23								--	+	++				+	++	+	++	++	+
24									--	++					-	--	--	+	-
26														+	-		+	-	+
34														-			+		
36															++	++	++		++
37																	+	-	
42																			
43																		++	-
46																			
47																			--
49																			
53																			

Table 8. 共起・非共起傾向を示したカテゴリー対

共起傾向にあるもの			
1 M : 乳児の位置をかえる	× 22 M : 乳児を見る		
11 M : 机の上に座らせる	× 23 M : 乳児の目を見る		
14 M : 軽くたたく	× 21 M : 他を向く		
18 M : 頭を動かす	× 47 I : 母親の顔を見る		
22 M : 乳児を見る	× 47 I : 母親の顔を見る		
23 M : 乳児の目を見る	× 36 I : 胸を動かす		
23 M : 乳児の目を見る	× 43 I : 足を動かす		
23 M : 乳児の目を見る	× 47 I : 母親の顔を見る		
24 M : 他を見る	× 34 I : 母親をつかむ、さわる		
43 I : 足を動かす	× 47 I : 母親の顔を見る		
47 I : 母親の顔を見る	× 53 I : 口を動かす		

非共起傾向にあるもの			
11 M : 机の上に座らせる	× 21 M : 他を向く		
14 M : 軽くたたく	× 22 M : 乳児を見る		
21 M : 他を向く	× 53 I : 口を動かす		
22 M : 乳児を見る	× 24 M : 他を見る		
22 M : 乳児を見る	× 46 I : 頭を動かす		
22 M : 乳児を見る	× 49 I : 他を向く		
23 M : 乳児の目を見る	× 34 I : 母親をつかむ、さわる		
23 M : 乳児の目を見る	× 49 I : 他を向く		
24 M : 他を見る	× 26 M : 笑い		
24 M : 他を見る	× 47 I : 母親の顔を見る		
47 I : 母親の顔を見る	× 49 I : 他を向く		

Table 9 母子行動の再分類カテゴリー

母	親	乳	児
1. 視	覚	1. 視	覚
2. 発	声	2. 発	声
3. 接	触	3. 接	触
4. 乳児を動かす		4. 動	き
5. 自分が動く		5. 表	情
6. 表	情	6. その他(指吸い等)	

Table 10 母子相互作用の3パターンモデル

1型		on off		2型		on off		3型		on off	
I	- on	H	L	I	- on	M	M	I	- on	L	H
	- off	H	L		- off	M	M		- off	L	H
M	- on	L	H	M	- on	L	H	M	- on	L	H
	- off	L	H		- off	L	H		- off	L	H

* (M)(I)はそれぞれ母子を意味し、上のon,offは相手の状態を示し、-on,-offはそれぞれ「onからoffになる」、「offからonになる」ことを意味する。さらに、各セル内のH,M,Lはそれぞれある行動カテゴリーの生起確率の高い、中くらい、低いを意味している。

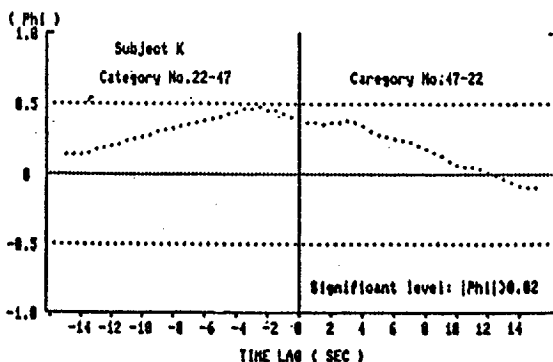


Fig.1 母子行動の相互性の時系列推移曲線(対象組K)

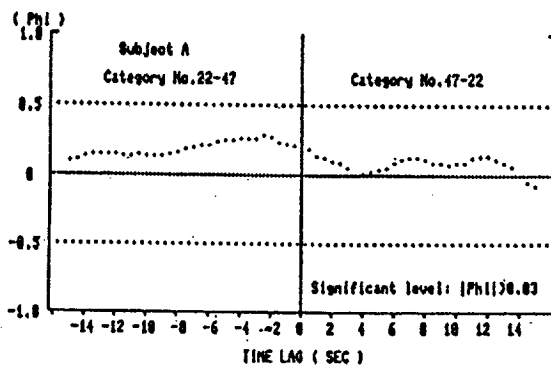


Fig.2 母子行動の相互性の時系列推移曲線(対象組A)

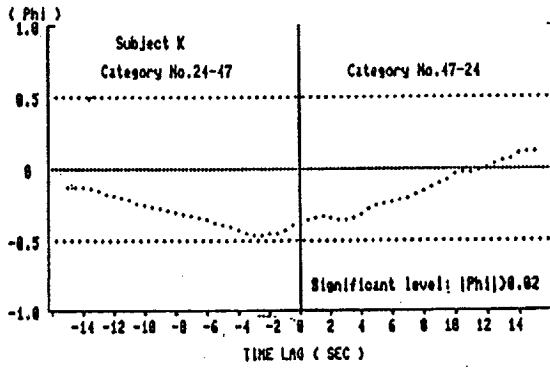


Fig.3 母子行動の相互性の時系列推移曲線(対象組K)

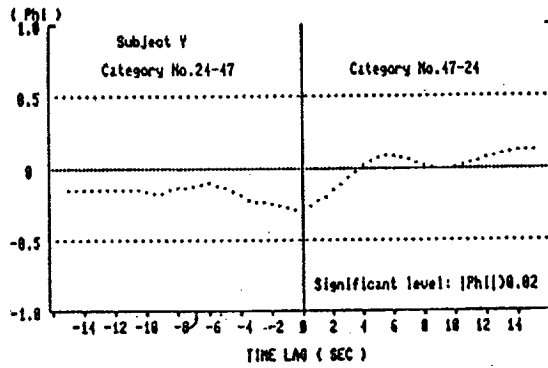
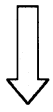


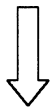
Fig.4 母子行動の相互性の時系列推移曲線(対象組Y)

注)Fig.1,2はカテゴリ-22と47, Fig.3,4は24と47の対。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



3年間にわたった本研究において、初年度の昭和55年度に「母親の乳幼児との相互作用行動が乳幼児の社会性及び知的発達に及ぼす効果についての研究」を行った。この研究では、272名の1歳半児を対象にした知的発達検査と社会性発達のチェックリストを実施し、さらに彼等の母親のパーソナリティと子供との相互作用のあり方について質問紙による面接調査を行った。この研究では、(1)内向的で、受容的な母親は、子供に動作的働きかけを多くし、子供と一緒にの時に気分的落ち着きが得られると感じている。(2)母親の子供への働きかけが、言葉よりも行動的に行われるほど、社会性の発達を促進する。(3)子供の知的発達には、母親が子供とともにいる時の気分の安定が、重大な影響をもたらす。以上3点が主な結果であった。これらの母親の子供への働きかけは、母親の行動様式と単純に結び付いたものというより、母親が妊娠後徐々に形成してきたであろう母性意識を介した力動的なものであることを予見した。そこで、昭和56年度には「妊婦の母性意識の変容過程に関する研究」として、妊娠から出産に至る女性の心理的変化過程が、彼女の母性意識形成及びその後の母子相互作用のあり方に影響することを仮定し、初産婦群と経産婦群に対して、彼女達が体験する種々の環境事象との相互作用の心理的過程の時間的変化について、質問紙調査を妊娠初期、中期、後期、出産直後の4期に縦断的に実施した。この研究結果の一部(妊娠3期の結果)については、昨年の班会議及び報告書において述べたが、今年度で出産直後期までの資料が得られたので、その分析結果及び考察を報告し、続いて、本年度の研究課題である「母子相互作用の行動的構造に関する研究」について報告する。